

ひきこもる青年の社会参加に影響する要因 —支援機関にアプローチするまでの体験の質的分析—

キーワード：ひきこもり、社会参加、支援機関

○斎藤まさ子¹⁾、本間恵美子²⁾、内藤守¹⁾、田辺生子¹⁾、藤野清美¹⁾、佐藤亨²⁾
新潟青陵大学¹⁾ 新潟青陵大学大学院²⁾

I 目的

ひきこもる青年が、社会への第一歩を踏み出すには、さまざまな不安や緊張を伴うといわれている。斎藤は、この時期を「社会との再会段階」と分類し、支援に関心を示すようになる頃から支援を受けるようになった段階を中心とする時期としている¹⁾。しかし、この段階にありながら、支援機関への参加に至らず家庭内に留まっている青年は少なくない。

本研究では、支援機関を経て就労中、あるいは現在支援機関に所属するひきこもり経験者に面接調査を実施し、支援機関の情報を得てから実際に参加するまでの心理社会的プロセスを明らかにし、社会参加への影響要因について検討することを目的とする。

II 方法

1. 対象者：北陸、九州地区に在住し、就労あるいは支援機関に所属するひきこもり経験者 12 名である。男性 8 名、女性 4 名で、20 代 4 名、30 代 8 名。平均年齢は 30.3 歳 (SD=3.98)、ひきこもり期間は 1-4 年が 9 名、10 年以上が 3 名であった。
2. データ収集：2014 年 7 月～2014 年 8 月に実施し、面接時間は 1～2 時間で半構造化面接であった。面接内容は、ひきこもり期間の社会に出るまでの心理社会的体験、親との関係の変化などであった。
3. 倫理的配慮：研究対象者に、①研究の趣旨、②任意性、③プライバシー保護、④録音の許可、⑤結果の利用、⑥データ処理について説明し同意書を取り交わした。新潟青陵大学倫理審査委員会の承認を得た。
4. 分析方法：木下による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを活用し、ひきこもる青年が支援機関の情報を得てから実際に参加するまでの心理社会的プロセスを分析テーマとして概念化を行った。

III 結果

ストーリーラインは以下のとおりである。<>はカテゴリー、≪≫はコアカテゴリー、『』は概念を示す。ひきこもる青年は、家では<ありふれた日常>を送り、『責められない安らぎ』や『役割のある生活』の中で『現実感の回復』に至っている。ある日<心揺り動かされる情報>を得るが、『なかなか出ない初めの一歩』であり、周りから『無理強いされてもムリ』な状態で、<時間だけが過ぎていく焦りと不安>の日々を送る。様々な<せっぱつまった事情>や『年齢に見合わない自分』『収入のない自分』への責めなどに背

中を押され、さらに『人と関わった』ことや『やったことの成果と自信』から≪自己の存在の実感≫を持つことで<腹をくくってハードル越え>に至る。

IV 考察

1. 行動を起こす前提となるもの

ひきこもりからの回復のためには、親が子への批判的対応から理解的対応へと変化することが求められるが、それにより、子がよい方向に変化することが研究により明らかにされている²⁾。「社会との再会段階」は親が後者の対応に変化している場合が多いが、分析結果でもそれが示されていた。竹中が、「家庭内社会化が、家庭外社会化の導入部となる」³⁾と述べるように、家族の成員としてのつながり・絆の中で、安全で決められた役割を担う日々の暮らしが、それ以降のプロセスを支えていく土台となるものと考えられる。

2. 影響要因

青年が動機づけられた情報を得たとしても、ひきこもりから一歩社会に出ることは、大きな不安や葛藤、緊張を伴うため、実際に行動に移すことは容易ではない。<せっぱつまった事情>はその動機の 1 つであった。『やったことの成果と自信』『人と関わった』の二者は、自尊感情へとつながるもので、特に『人と関わった』は、青年が他者から社会人として認められ、≪自己の存在の実感≫を味わえ<腹をくくってハードル越え>ができる、重要な影響要因となっていた。

V 結論

行動を起こす前提となるものが、家庭でのありふれた生活であり、直接的、間接的な影響要因が互いに影響しあって、社会参加を可能とすることが示唆された。特に、小さな成功体験や家族以外の第三者と関わる体験が、大きな影響を与えていた。

本研究は、平成 26-28 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (No. 26463511) の助成を受けて行った。

引用文献

- 1) 斎藤万比古. ひきこもりに出会ったら. 27. 東京：中外医学社；2012.
- 2) 斎藤まさ子. 本間恵美子. 真壁あさみ. 内藤守. ひきこもり親の会で母親が子どもとの新たな関わり方を見出ししていくプロセス. 家族看護学研究. 2013；19(1)：12-22.
- 3) 竹中哲夫. ひきこもり支援論. 40-65. 東京：明石書店；2010.